

目次

必須の疑念

5

訳者あとがき

393

## 主要登場人物

- カール・ツヴァイク……………オーストリア人哲学者。六五歳
- サー・チャールズ・グレイ……………元ロンドン警視庁副総監。ツヴァイクの友人
- アロイス・ノイマン……………ツヴァイクの旧友。脳外科医、正統派ユダヤ教徒。ドイツ人
- グスタフ・ノイマン……………アロイスの息子。ツヴァイクの教え子。一九一一年生まれ
- エルンスト・ユンガー……………ツヴァイクの教え子。反ユダヤ主義者
- ジョン・スタフォード・モートン……………精神科医
- サー・ティモシー・ファーガソン……………グスタフの雇い主？
- ジョウゼフ・アソル・ガードナー……………サー・ティモシーの知人
- ナターシャ・ガードナー……………ジョウゼフの妻。三二歳
- アルバート・コルブライト……………元ロンドン警視庁主任警部
- テリー・サムズ……………カメラマン

必須の疑念

## 題 辭

重要なことや本当のことを、いまだ一つも人が見たり知ったり口にしたりしたためしがないなど、ありうるか。物事を眺め、考え、記すために何千年もの時を得ながら、サンドウィッチやリングゴを食べて終わる学校の休み時間よろしく、人がその長き時をぼんやり過ごしたということがありうるか。

うむ、ありうる。

進歩や諸々の発見もしてきたのに、我々はいまだ人生の上っ面を漂っているのみということがありうるか。

うむ、ありうる。

世界史が丸ごと誤解されてきたということがありうるか。

うむ、ありうる。

かつて存在しなかった過去を人々が申し分ないほど正しく知ることがありうるか。あらゆる現実が人々にとっては無であり、誰もいない部屋にある時計のごとく、人々の人生が何物ともつながらぬまま営まれてゆく、ということがありうるか。

うむ、ありうる…….のでは？

だが、もし以上のごとがすべてありうるなら——そんな気配だけでもあるなら——ならばきつと…….何かしないといけないか。はじめに気づいた者は…….今まで顧みられもしなかったことの一部でも手を着けねばならない…….自分のそばには誰もいない。

リルケ（『マルテの手記』第一部「九月一日 トウリエ街にて」抄訳）

本書の題名は、パウル・テイリヒ(一八八六—一九六五、ドイツ系アメリカ人のプロテスタント神学者)の神学から借用した。主人公カール・ツヴァイクは、テイリヒ教授と同じく、大学で教鞭を執る『実存主義神学者』だ。教授個人に模したつもりはない。

犯罪と催眠状態との問題に関して挙げた諸事実、またサラの事例研究ケイスタディやハイデルベルクケイスタディの事例研究ケイスタディについては、P・J・ライター教授の『反社会的行為、犯罪と催眠状態』(一九五八)に教示された。犯罪と睡眠状態という主題をかかげた作品はほかにも実在するが、いずれも参照はしていない。

#### ハイデガー『存在と時間』についてのカール・ツヴァイク教授の解説抜粋

「いかなる意味で、人は無限の自由を有すると言いうるのか。人は空を飛べない。肩をいからせて不快な気分を追い払うこともできない。退屈な責務から目をそむけて、その責務をなきものとすることさえできない。ならば、いかなる意味で人は自ら意識せざるほどの自由を有するのか。

この自由が物理の分野に属すると思う点に誤りがある。そうではない。解説するには類推の手を用いるしかない。人は病にかかると、何か少しでも無理をするたびに活力を奪われる。何かを試みたいと思ひ、そのさなかに妨げを被ると、座り込んで泣きたくなる。それでも健康なときなら、どんな障害にも気軽に対処し、容易に克服できる。人が数千年にわたって生存してきた状態は、病気に似かよっている。生きるにはなんらかの努力が必要であり、しかもこの努力はずっと続くものであり、人

間の条件のいかんともしがたい一部に見えるので、人生自体の一特徴であると我々は考える。そうするなかで、我々は世界に対する自身の見方に、自身の病氣と消耗という症状を読み込んでいるにすぎない。人は耐えられるのだ、自身の現状をありのままに示す自由の状態、つまり病人の消耗と不信に。しかし、何が我々をこの条件に封じ込めているのか。原罪？ 生物学はそんなありさまを認めていない。人間を病氣と恐怖という二次元世界に閉じ込めるのは習慣のみだ。我々と霊長類の祖先とのあいだに存する何百万年にもわたる習慣。

（中略）我々の文明が知的破産状態にあるという言い方はありきたりだ。とはいえ、かなり真実味はある。組織運営の仕方が時代遅れなため、なすすべなく落ちぶれゆく小規模企業さながらだと見なすほうが、いっそう気が利いていよう。我々には能率向上の専門技師が何人か必要かもしれない。

（中略）人生を夢と呼ぶのは無意味だ。人生の全体を人生の一部にたとえているにすぎない。人生で興味深いのは、我々が不断に、しかもほぼ無意識に、解釈の作業にいそしんでいる（現象学）ことだ。我々は「記号」を読む。新聞を読むように、胃袋の餓えや背中の痛みを読む。夢は日常生活のような解釈すべき一連の形態や象徴だ。だから人生を夢と呼ぶのは無意味なのだ……。」

## 第一章

シエパーズブツシユ(ロンドンのハイドパイク西にある地区)でタクシーが角を曲がると、ひらひら降り始めた雪片が窓に当たった。車がノッティングヒルに向かうなか、雪が激しくなってきた、数フィート先まで見えるのがやっとだった。運転手が言いだした。

「やっぱりなあ。こうなると朝から思ってたんでさ。さもなきや雨かと」

カール・ツヴァイク教授は黙っていた——運転手のなれなれしい口ぶりにかちんときたからではなく、言うことが思いつかなかったからだ。返事がないのは無視されたからではないとわかったらしく、相手は語を継いだ。

「今朝カミさんに言ったんですよ——雪のクリスマスを迎えるとなると、一九四八年以来だなんて」  
ツヴァイクはどうにか口を開いた。「そうかね」

「だからって、どうでもいいけどね。あつしにすりゃいい迷惑ってだけの話だ。チビどもは嬉しいだろうけど」

ノッティングヒルゲートは、地区内の建物が半数ほど取り壊されていて、奇妙で殺風景に見える。一九四五年に目にしたハンブルクのありさまがツヴァイクの頭によみがえってきた。ぞくぞくするほど寒い感じも。アウセンアルスター湖の黒ずんだ水に降り注ぐ雪や、湖の向こうから漂ってくる腐乱

死体の悪臭のことを、ツヴァイクは思い返した。そのとき、運転手が声を発して、懐旧の情や不信の念は吹き飛ばされた。

「変なことを訊いてごめんさいよ、でもだんな、テレビで見たお顔じゃありませんかね」

ライムグロブ(BBCテレビのスタジオ)の外でツヴァイクはタクシーに乗ったので、こう訊かれるのも意外ではなかった。

「かもしれない。たまに『専門家におたずねします』って番組に出ているから」

「だと思った。見たことあるなと思いましたよ。あのスタジオ前で、よくテレビの有名人を乗せるんです。こないだアーサー・アスキーを拾ったな……」

運転手がしゃべり続けるなか、車はクリスマスマススイブで混み合うベイズウォーターロードをのろのろ進んだ。ツヴァイクはもう話を聞いていなかった。ハンブルクのことか思い出されると、ほかの記憶もいろいろ頭に浮かんだ。降る雪が記憶のよみがえりを促したかのように。遅い時間ながら、子連れの買い物客でオックスフォード街はにぎわっている。客たちは天幕の下で雪を避けながら、ショーウィンドーを眺めている。子ども好きのツヴァイクは、かつてハムステッド(ロンドン北西部の高級住宅地)で、妹や甥たちと何度かクリスマスを過ごしたことを思い起こした。座席の反対側のすみに押し込むように置いてある中身でふくらんだ紙袋に、のっそり手を伸ばした。袋にはテレビ局へ行く途中で買ったおもちゃが入っている。

タクシーはノースオードリー街(ハイドパークの東イフエアにある通り)に入った。ほんやり物思いにふけていたツヴァイクは、ふと我に返って内心つぶやいた。「大人がクリスマス好きなのは、人生は挫折の連続だったことを忘れさせてくれるからだな。子どもがクリスマス好きなのは、人生は心やさしくて、最後に



は贈り物が待っているという幻想を抱かせてくれるからだ」こんなことをなんとなく考えているうち、ある思い切った試みをしてみる気になった。短い論文にまとめようか。題名は「クリスマススの弁護」だ。なぜクリスマスス人気は落ちないのか——むしろ上がっている——他方キリスト教信仰は薄れている……ツヴァイクは後部座席の窓を下げ、たばこの吸いさしを投げ捨てると、身を乗り出すように前方を見すえた。タクシーはカーゾン街の信号で停まった。信号の向こう側では、やはりタクシーがホテルの前に停まっております、接客係がドアを開けて一人の老いた男を車内に入れてやった。夜会服を着た若いほうの男が、接客係のさす傘で雪を避けながらそばに立って老人の乗り込みを待ちながら、ツヴァイクを乗せたタクシーのほうをなんとなく見ている。ツヴァイクの興味を一気に掻き立てた対象はこの年下の男だった。タクシーが相手のタクシーの後ろを通るときに呼びかけてやろうか。信号が変わる前に相手が走り去っては困るので、ツヴァイクは窓から身を乗り出し、今にも外に飛び出て手を振らんばかりになった。しかし、この客は乗り逃げするんじゃないかと運転手に誤解されるかもしれない。しかも、ツヴァイクがぐずぐずするうち、若いほうの男は相手のタクシーに乗り込んで、ドアをばたんと閉めた。信号はまだしつこく赤だ。相手のタクシーは走り出し、ほどなくシエパードマーケットトへ入っていった。一瞬ツヴァイクは、あれを追ってくれと運転手に言おうかと思つたが、それを打ち消し、運転手に顔を近づけて口を開いた。

「あのホテルの前で停めて」

「クラージズ街(メイフエアにある通り)に行かれるんじゃないんですかい」

「うむ、でもいいんだ」

タクシーは交差点を過ぎて停まった。くだんの接客係が近づいてドアを開けた。ツヴァイクはおも

ちゃ入りの袋のことを思い出し、心を決めた。「ちよつと待つて。すぐだから」ツヴァイクは接客係に声をかけると、金を取り出そうとポケットを探った。

「さっきのタクシーに乗った男性だが——ここに滞在しているのかね」

「違うと思います」

「運転手に行き先を告げたはずだが、聞こえたかね」ツヴァイクはすぐ言い足した。「あの人はわたしの友人なんだ」

「申し訳ありません、聞こえませんでした。乗り込まれるまで行き先はおっしゃいませんでした。フロントでおたずねになったらいかがでしょうか。職員ならわかるかもしれません。ありがとうございます」

ツヴァイクは回転ドアを抜けて、暖かな空気と蠟の解けるにおいの漂う建物内部に入った。このにおいのお出どころは、一面に火のともったろうそくのついた巨大なクリスマスツリーだった。すみに立っている木だ。一人の若い男がにこやかに近づいてきた。

「お泊まりでしょうか」

ツヴァイクは先ほどと同じことをたずねた。若い男——たぶん副支配人だろう——はうさんくさそうな顔をした。

「そのお二方はお泊まりではないと存じます。お食事をお摂りになっただけでして。初めてお見えになられたお客さまかと。少々お待ちください、確かめてまいります」

男はダイニングルームに消えた。ツヴァイクは後先かまわずタクシーを停めたことをしまったと思い始めた。とにかく自分は、緞帳のごとく降りしきる雪を透かしてあの者を目にしたのだ。見聞違い

だったということも十分ありうる。それからすぐ、副支配人が離れたところからツヴァイクを手招きした。ダイニングルームの入り口に立って、給仕頭と話をしている。後者はかなり背が高く、スペイン人のように見える。だが口を開くと、出てきた言葉には下町なまりコックナーがあった。

「すみませんが、お役にや立ってません。おたずねの方々はお食事に見えたんで」

何か言わなければいかんと、ツヴァイクは一つたずねた。

「このホテルは宿泊しない客もよく受け入れるのかね」

「そうでございますとも」愛想よい笑顔だ。客からチップをもらって礼を述べてきた年季入りの声だ。

「当方の仕出しは有名ですと、申し上げてもよろしいかと」

「だろうな」ツヴァイクは急いで応じた。

「お伝えできるのはですね、お年を召した紳士はスコットランドの方で、お若いほうの紳士は外国人  
つてことです。目上の方はお若い方をグスタフと呼んでおられました」

「そりゃよかったー」ツヴァイクは声をはずませた。「わたしの友人じゃないか、グスタフ・ノイマンだ。もう三〇年以上も会ってない」うきうきした気分のせいで、何かいいことを言ってやりたくなり、こう付け加えた。「鋭い観察力を持っていてすごいね。優秀な刑事になれるだろう」

「あたりまえのことです」給仕は目を輝かせた。

「残念だな、あの男がここに泊まっていけないとは……ああ、そうだ」ツヴァイクは副支配人のほうを向いた。「お手間を取らせてしまって申し訳ない」

「そんなことはございません、教授。こちらこそ光栄です」

「わたしを知っているのかね」

「三〇分前にテレビで拝見しました」

業務のじゃまをして悪かったなと思っていたツヴァイクは、これで気が楽になった。クリスマスツリーを見つめている子どもを軽く叩くと、相手の二人にまた礼を述べて外へ出た。接客係がタクシーのドアを開けてくれた。

「お探しの方は見つかりましたかい、だんな」

「だめだったよ、残念ながら」ツヴァイクが答えた。

## 第二章

居間は寒かった。夜はクラブで過ごすから、わざわざ火を起こさなくていいと、管理人には告げておいた。夜遅く冷え切った部屋へ入る不愉快な感じを忘れていた。

ツヴァイクには自宅の部屋がどれも自慢だった。一九三三年から使っている。もつとも、当時から十二年は同僚に又貸していたが、時代物めいた部屋ばかりで、暖炉がある。暗緑色の壁紙は、いつまでもはがしたくない。床には茶色い厚手の絨毯が敷いてある。使い古したが、まだ十分ゼいたくない品だ。シャーロック・ホームズとワトソン博士が使っていたような部屋ばかりだろうと、ツヴァイクはおりにふれて言った。部屋代は心もち支払いの厳しい額——新しい家主は何かにつけ値上げしてくる——とはいえ、この家を手放したときのことを考えるだけで、臨終の床にいそうなほど全身が寒々として気が落ち込む。

ツヴァイクは一本棒の電気ヒーター——本当は気に入らない新機軸の製品で、なるべく使わずにいる——のプラグを差し込み、ドライシユリーをグラスに注いだ。書斎に入り、書き物机の最下段の引き出しを開け、傷んだ革表紙のアルバムを取り出した。次いで別室に戻り、肘掛け椅子にどかりと腰を下ろし、読書用めがねを鼻に載せた。アルバムをめくってゆきながら、シユリーをちびちび飲んだ。ヒーターのおかげで向こうずねが暖かくなった。昔懐かしい気持ちさが再び芽生えた。そうだ、寝る前

〔著者〕

コリン・ウィルソン

英国、レスター生まれ。16歳で経済的事情により学校を離れ、様々な仕事に就きながら執筆を続ける。1956年、評論『アウトサイダー』を発表。これが大きな反響を呼び、作家としての地位を確立。主な著書に『殺人百科』(61)、『オカルト』(71)など。

〔訳者〕

井伊順彦 (いい・のぶひこ)

早稲田大学大学院博士前期課程(英文学専攻)修了。英文学者。主な訳書にサキ短篇集『四角い卵』(編訳、風濤社)、ジョイス・キャロル・オーツ『生ける屍』(扶桑社)など。英国トマス・ハーディ協会、英国ジョウゼフ・コンラッド協会、英国バーバラ・ピム協会各会員。

ひつす ぎねん  
必須の疑念

——論創海外ミステリ 229

---

2019年3月25日 初版第1刷印刷

2019年3月30日 初版第1刷発行

著者 コリン・ウィルソン

訳者 井伊順彦

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル  
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266  
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1802-3

落丁・乱丁本はお取り替えいたします